慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Cosmogonia と Analogia : Pindaros Nemea VI 1 ~ 7
Sub Title	
Author	西村, 太良(Nishimura, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.377(12)- 388(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0388

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Cosmogonia と Analogia

～Pindaros *Nemea VI* 1～7～

西 村 太 良

Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος· ἐκ μιᾶς δὲ πνέομεν
ματρὸς ἀμφότεροι· διείργει δὲ πᾶσα κεκριμένα
δύναμις, ὡς τὸ μὲν οὐδέν, ὁ δὲ χάλκεος ἀσφαλὲς αἰὲν ἕδος
μένει οὐρανός. ἀλλά τι προσφέρομεν ἔμπαν ἢ μέγαν
νόον ἤτοι φύσιν ἀθανάτοις,
καίπερ ἐφαμερίαν οὐκ εἰδότες οὐδὲ μετὰ νύκτας
ἅμμε πότμος
ἄντιν' ἔγραψε δραμεῖν ποτὶ στάθμαν.
τεκμαίρει { δὲ } καί νυν Ἀλκιμίδας τὸ συγγενὲς ἰδεῖν
ἄγχι καρποφόροις ἀρούραισιν, αἴτ' ἀμειβόμεναι
τόκα μὲν ὧν βίον ἀνδράσιν ἐπηετανὸν ἐκ πεδίων ἔδοσαν,
τόκα δ' αὖτ' ἀναπαυσάμεναι σθένος ἔμαρψαν. ἦλθέ τοι
Νεμέας ἐξ ἐρατῶν ἀέθλων
παῖς ἐναγώνιος, ὃς τᾶυταν μεθέπων Διόθεν αἶσαν
νῦν { τε } πέφανται
οὐκ ἄμμορος ἀμφὶ πάλᾳ κυναγέτας,
ἴχνεσιν ἐν Πραξιδάμαντος ἐὸν πόδα νέμων
πατροπάτορος ὁμαιμίοις.
κεῖνος γὰρ Ὀλυμπιόνικος ἐὼν Αἰακίδαις
ἔρνεα πρῶτος <ἔνεικεν> ἀπ' Ἀλφεοῦ,
καὶ πεντάκις Ἰσθμοῖ στεφανωσάμενος,

(1)

Νεμέᾳ δὲ τρεῖς, ἔπαυσε λάθαν
Σαοκλείδα', ὃς ὑπέρτατος
Ἀγησιμάχοι' ὑέων γένετο.

(*Nem. VI* 1～22)

(大意—人間の種も神々の種も（元来）1つ。そしてわれわれは両方とも一人の（同じ）母親から生命の息吹を得ている。そうは言っても全くかけ離れた（神々に与えられた）力が（われわれを）分け隔てている。即ち一方（の人間）には何1つないのに対して、他方（の神々）には青銅の天空（ウーラノス）が永遠に揺らいぐことのない台座をささえているのだから。しかしにもかかわらずわれわれは（ゼウスの）偉大な意思か、あるいは生まれついた素質に恵まれる時、多少なりとも神々に近づくこともある。確かにわれわれは昼間もまた夜の間も運命がわれわれにいかなる走路にそって走るよう書き記したのか知らないけれども。

そして今もアルキミダースはその生まれもった力を目に見えるしるしとして示している。ちょうど巡り来る時に従い、ある時は土地から年毎の生活の糧を人間に与え、またある時は反対に休息して力を貯える、あの実りをもたらす耕地のように。ネメアのなじみ深い競技会から少年選手が帰ってきた。ゼウスから分与された運命を追い求め、今またレスリングでも不運な猟師ではないことを実証してみせた。

祖父プラクシダマースの血のつながった足跡に自らの足をのせて。というのはかの人（プラクシダマース）こそオリュムピア（競技会）優勝者として最初のオリーブの冠をアルペオス川からアイアキダイ家にもたらし、イストミア（競技会）で5度、ネメア（競技会）で3度、（優勝の）冠に輝いて、（父）ソークレイダースに対する忘却を終らせたのだから。（そのおかげで）彼（ソークレイダース）はハーゲシマコスの息子たちの内で最も名高くなったのだが。）

1. Prooimion（序歌）

ピンダロスのネメア祝勝歌集第6歌（＝*Nem VI*）のProoimion（序歌）（v.1-7）は、そのcosmogoniaを思わせる内容と謎めいた曖昧さのために古来問題となってきた。問題の焦点は第1にv.1 *Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος* の解釈とその背後にあると思われるcosmogoniaの正体、そして第2にv.4～5 *ἀλλά τι προσφέρομεν ἔμπαν ἢ μέγαν νόον ἤτοι φύσιν ἀθανάτοις,* の人間と神々の親近性の意味にしぼることができるだろう。

先ず冒頭の *Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος* は 1）*ἓν ἀνδρῶν καὶ ἓν θεῶν γένος*（人間と神々の*γένος*は同一）なのか、それとも 2）*ἓν ἀνδρῶν, ἕτερον θεῶν γένος*（人間と神々の*γένος*は別個）なのかで意見が分かれている。scholia（古注）は人間と神々は共通の母親をもつが故に同一の*γένος*だとし[2]、18世紀末のHeyneの刊本に至るまで概ねこれに従っていたが[3]、19世紀初頭、Boeckh－Dissenはこれを文法的誤まりであり、意味的にも力の点で全く異なる人間と神々が同じ*γένος*であるのはおかしいとして2）を主張した[4]。しかし、その後Christも指摘しているように、文法的にどちらか一方が正しいとする決め手はなく、今日に至るまで平行線を辿っている[5]。また*γένος*の意味も前者の場合は同じ起源から発した（通時的）*γένος*であるのに対して、後者では同質的な（共時的）*γένος*ということになる[6]。

これに関連して次の *ἐκ μιᾶς δὲ πνέομεν ματρὸς ἀμφότεροι* の人間と神々の共通の母親とは誰なのかという問題になると、*γένος*が通時的であれ、共時的であれ、そのcosmogonia的背景についての様々な意見が展開されることになる。scholiaはヘシオドスの「神統記」126/7と「仕事との日々」60/2を援用して大地（ガイア）がその母親だとしている。しかしその引用箇所は *Γαῖα μέν τοι πρώτιστον ἐγείνατο ἴσον ἑαυτῇ Οὐρανὸν ἀστερόενθ', ἵνα μιν περὶ πάντα καλύπτῃ.*（大地は先ず最初に彼女自身と等しい大きさの星々に彩られた天空（ウーラノス）を生み出した。彼女を隅から隅まで

覆うようにと *Theog*126/7)、及び *Ἥφαιστον δ' ἐκέλευσε περικλυτὸν ὅττι τάχιστα γαῖαν ὕδει φύρειν, ἐν δ' ἀνθρώπου θέμεν αὐδὴν καὶ σθένος, ἀθανάτης δὲ θεῆς εἰς ὦπα ἐΐσκειν.* (そして（ゼウスは）名高いヘーパイストスに次のように命じた。出来るだけ急いで土（ガイア）を水で捏ね、その中に人間の声と力を吹きこみ、姿形は不死なる女神に似せよと。*Op.* 60/2）であり、確かに*γαῖα*は両方ともに出てくるが、一方は世界創生の時の女神ガイアであるのに対して、他方は材料としての土（ガイア）に過ぎない。これらの2つの引用は、むしろこの後に続く v.3-4の天空（ウーラノス）及び v.5の*φύσις*を説明するためにこそ相応しいのではないだろうか[7]。これに対して大地が母親であることは認めながら、より一般的な万物の母としての大地という程度にとどめ、特定の cosmogonia とは敢えて結びつけない考え方の方が今日では一般的である[8]。しかし、その一方で、例えばアレクサンドリアのクレメンスのようにここがピュタゴラス派の哲学の影響を受けており、1人の母親とは原初物質*ὕλη*を表わしているとか[9]、あるいは逆にこの部分をもってピンダロスがオルペウス派の Theogonia を熟知していた証拠であるとみなす考え方もある[10]。この問題についても、われわれはそれを直接判断できるだけの充分な材料をもっているとは言えない。しかし、いずれにしてもピンダロスがここで、人間を神々によって作られたとか、神々の子孫としてではなく、共通の母親をもつある意味で対等な存在として位置づけていること、言い換れば神々の世界と人間の世界の背後により広い根源的な存在を見ていることは確かであろう。

第2に v.4-5 *ἀλλά τι προσφέρομεν ἔμπαν ἢ μέγαν νόον ἤτοι φύσιν ἀθανάτοις,* だが、ピンダロスは v.1-2で人間と神々が共通の母親をもつと歌った後、しかし人間と神々の置かれている状況はまるで違う、神々には恒常的で安定した世界があるのに、人間には何もないと続け、更に再びここで留保付きではあるが人間と神々の親近性に戻っている。しかし、それはどのような意味での親近性なのだろうか。もし*προσφέρομεν*が scholia がパラフレーズしているように「似ている」という意味ならば、

ἢ μέγαν νόον ἤτοι φύσιν　という限定の下で人間が神々に似ていると言われている訳だが、この限定が一般的条件（全ての人間のもつある部分が神々に似ている）なのか、特殊な条件（人間はそれらをもつ時、あるいはそれらをもつある人間たちは神々に似ている）なのか、もう1つ明確ではない。scholia は νόος の説明としてエウリピデスの　*θεὸς γάρ τις ἐν ἡμῖν*（われわれの内にはある神性が宿っている fr.1018）を引用し、また*φύσις*については（先のヘシオドス *Op.*60/2からも）身体の見事さと美しさ（*κατὰ τὰς εὐφυίας τῶν σωμάτων καὶ τὰ κάλλη*）とパラフレーズしていることから、人間の一般的条件ととっているようである[11]。しかし*φύσις*についてはいわば神人同形説とでも言えるものと考えられるが、*νόος* の説明はよく判らない。確かにピンダロスは *νόος* を神々についても、人間についても同じように用いており、*μέγας νόος* も *Py. V*122 ではゼウスの考え、意思として用いてはいるのだが。今日までの研究者は、*φύσις*をもっと広い意味でとるべきだと考える人たちも含めて基本的にはこの枠組の中で解釈している[12]。即ち、人間の中のある部分は神々に由来するか、神々をモデルとしている、それ故それらの点において人間は神々に似ている、とでも言えようか。

しかしピンダロスが言おうとしているのはそういうことなのだろうか。先に触れた*προσφέρω*という動詞は scholia によれば「似ている」（*ἐμφερές τι ἔχομεν, ἐοίκαμεν*）とパラフレーズされているが[13]、本来は他動詞であり、この場合のように限定の対格と共に自動詞として用いられている例は LSJ によれば本例を含めて3例しかない[14]。その内にはもう1つピンダロスの断片（*fr.*43）が含まれているが、*ὦ τέκνον, ποντίου θηρος πετραίου χρωτι μάλιστα νόον προσφέρων πάσαις πολίεσσιν ὁμίλει . . .*　（息子よ、海に住む岩のような生物（＝蛸）の（場所によって変化する）皮膚にお前の考え方を似せて、あらゆる国々で交際するように…）というように、そこには「自分自身を」という意味が含意され、「似ている」ではなく「似せる」という意味を表わしている。そうだとすれば同じ *νόον* を限定の対格としてもつ本例も同じように考えうる

のではないだろうか。この違いは一見小さいように見え、実際あまり注意が払われていないが、先に述べた一般的条件と特殊な条件の違いを考える上では重要な意味をもっている。そしてピンダロスの他の作品の中での言葉はむしろ特殊な条件下にのみ人間は輝きを得ることが出来るということを強調している[15]。この場合でも例えば競技会での（優勝）（*φύσις*）とその栄光の詩歌による不滅化（*μέγας νόος=σοφία*）などが最も相応しい条件かもしれない[16]。あるいはエピニキアの神話のテーマとしてしばしば登場する（神的な生まれをもつ）=*φύσις*）若き英雄が敢えて試練に立ち向かう勇気を発揮すること（*μέγας νόος*）により自らを実証してみせるという exemplum も考えられるだろう[17]。

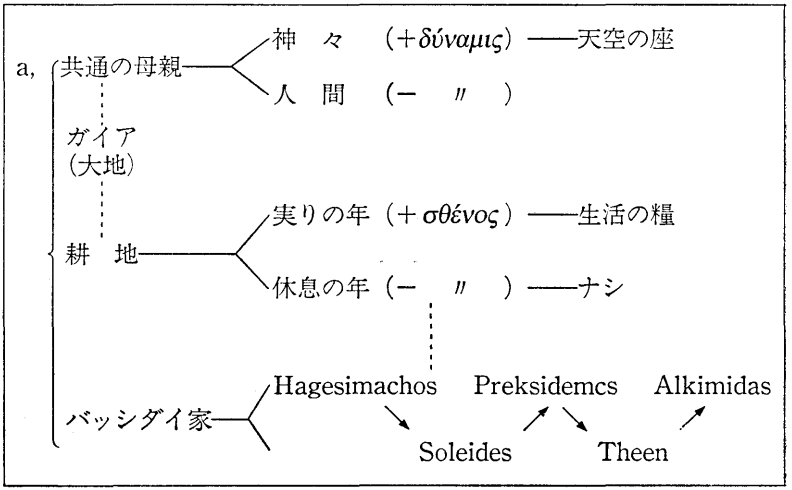
しかしここでも両者の違いは非常に微妙で曖昧な言葉の中に隠れて明確な形では表わされていない。もしこの prooimion を通じてある一貫した cosmogonia 的背景が存在するとしても、それは少なくともこの部分の内部からは明らかにできないと言わざるをえない。そしてそれは多分にピンダロス自身の意図に添ったものでもある。

2．Analogia

Prooimion はその本来の起源が何であれ、神々への祈りの形をとるにせよ、この場合のように gnōmē（格言）の形をとるにせよ、歌の本題（競技祝勝歌（エピニキア）の場合には勝利のテーマ）を引き出す役割を果さねばならないことに変りはない[18]。この場合も cosmogonia のような見かけを持ち、人間と神々との間の分離と融合を繰り返しながら、基本的には意味が曖昧な文（例えば *Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος*）に対してそれを補促説明する文（例えば *ἐκ μιᾶς δὲ πνέομεν ματρὸς ἀμφότεροι*）が応答するような形でリズミカルに、しかも次第に調子が高まっていくように話題が発展し、最後の *ἀλλά τι προσφέρομεν . . .* の文に対する説明（具体例）のような形で本題のアルキミダースの勝利を導き出しているのである[19]。この一般的な真理（gnōmē）から特殊なケースへ絞りこんでいく手際のよさはピンダロスの得意とするところだが、この後延々と続いて

いく勝利者の一族の栄光の歴史の前にやや唐突とも言える形で耕地の比喩（v. 9 —11）が挿入されている。

この *Nem. VI* はアイギナ出身のアルキミダースのために、ネメア競技会での少年レスリング競技優勝を祝って書かれた歌である。アルキミダースは名門バッシダイ家の出で、綺羅星のように有名な運動家を一門に持つが、特に祖父プラクシダマースはイストミア競技会で5度、ネメア競技会で3度、更にオリュムピアでも優勝した大運動家であり、またその祖父のハーゲシマコスも優れた運動家であった。つまり奇妙なことにこの家系は一代おきに優れた競技者を出してきた訳で、これが耕地の比喩の直接の背景になっているのである。*ἄγχι καρποφόροις ἀροῦραισιν, αἴτ' ἀμειβόμεναι τόκα μὲν ὧν βίον ἀνδράσιν ἐπηετανόν ἐκ πεδίων ἔδοσαν, τόκα δ' αὖτ' ἀναπαυσάμεναι σθένος ἔμαρψαν.*（ちょうど巡り来る時に従い、ある時は土地から年毎の生活の糧を人間に与え、またある時は反対に休息して力を貯える、あの実りをもたらす耕地のように。v.9—11）ここでのアナロジーは極めて明瞭だろう。一代おきに優れた競技者を出してきたバッシダイ家の血筋が、休息期間をおいて実りをもたらす耕地に喩えられている。[20]



しかし同時にこの耕地の比喩はprooimionに見えた人間と神々の共通の母親である大地(ガイア)とも連想上のつながりをもっている。そして更に注意深く見ていくと、この耕地の比喩を軸としてprooimion全体とバッシダイ家の栄光の歴史（v.8—22）の間にルーズな形ではあるが一定のアナロジカルな関係があることが判る。それを図示してみると上記のようになる。

更にprooimionと耗地の比喩の間には言葉の表現の上での照応も見られる。例えば *'αμφότεροι*（v.2）に対して *'αμειβόμεναι*（v.9）*'δύναμις*（v.3）に対して *σθένος*（v.11）、*τὸ μὲν—ὁ δὲ*（v.3）に対して *τόκα μὲν τόκα δέ*（v.10—11）など。またprooimionの後半は、これほどはっきりした形ではないが、アルキミダースの勝利との間のアナロジーが見られる。

b. 人間は *μέγας νόος* と *φύσις* で神々に近づく ……{ 生まれもった力（*τὸ συγγενές*）／ゼウスから与えられた運命（*Διόθεν αἶσα*）

|

しかし運命の *στάθμα* は不可知 ……祖父の足跡（*ἴχνεσιν*）

τὸ συγγενές が *φύσις* に対応するのは問題ないが、*μέγας νόος* の場合は *Py. V* 122/3 *Διός τοι νόος μέγας κυβερνᾷ δαίμον' ἀνδρῶν φίλων.*（まことにゼウスの広大無辺な考えがお気に入りの人間の運命をお導きになっている）から *Διόθεν αἶσα* とのつながりを考えてみた[21]。それまでのprooimionの組立から見てv8以下のアルキミダースの勝利がv4～5の *ἀλλά τι προσφέρομεν . . .* を補足説明していると解釈できるからである。

これらのアナロジーの関係は一方において歌の各部分を有機的に結びつけ、必要な話題を引き出していく役割を果しているが、逆にprooimionの方が、引き出されたアルキミダースの勝利及び耕地の比喩によって曖昧だった意味が限定され、明確化されていくという効果もある。それは

必ずしも prooimion が当初与えた印象が誤まりだったということを意味しないが、先にも見た通りピンダロス自身が意図的にそうした効果を計算していたとも考えられる。しかしそれらが全くその修辞的機能だけのために考えられたとすることもできないはずである。最後にその問題について考えてみたい。

3. Cosmogonia

そこだけ他と切り離して考えてみると、いかにも謎めいて曖昧さにみちていたこの prooimion も、その修辞的構造やアルキミダースの勝利の部分とのアナロジカルな関係から見直してみると、全体のコンテクストの中での意味（あるいは機能）が多少なりともはっきりしてきたように思う。今、その主な点をまとめてみると次のようになる。

① *Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος* prooimion 内部の構造から *ἐκ μιᾶς δὲ πνέομεν ματρὸς ἀμφότεροι* が意味を補足していると考えると、人間と神々の種は（元来＝起源として）同一となる。

② *προσφέρομεν ἔμπαν ἢ μέγαν νόον ἤτοι φύσιν ἀθανάτοις,* アルキミダースの勝利の部分とのアナロジーから *μέγαν νόον* が *Διόθεν αἶσα, φύσις* が *τὸ συγγενές* に対応しているとすると、「運命」と「素質」に恵まれれば、神々にも近づくとなる。

勿論これは prooimion の構造、及びアナロジーという観点に立っての解釈であり、これで問題が全て解決した訳ではない。むしろ本当の問題は修辞的な骨組が明らかにされた地点から始まると言うべきかもしれない。

先にも述べた通り、この prooimion の背後に何らかの cosmogonia が存在しているか、否かについては、われわれには判断を下すだけの充分な材料があるとは言えない。仮に例えばピンダロスの cosmogonia などというものがあったとしても、それは恐らくヘシオドスやピュタゴラス派の cosmogonia とはかなり性質を異にするものではないだろうか。確かに scholia をはじめ多くの学者が説いているように、この prooimion

にはヘシオドス的表現がいくつか含まれており、また人間も神々も共に大地(ガイア)と天空(ウーラノス)の子であるという点は、オルペウスの教義の中核をなすものではあるが、[22] ピンダロスにこの prooimion を書かせた動機は、そうした仰々しい cosmogonia の体系に照らして、1人の少年の勝利の意味を説いて聞かせるというよりは、むしろ逆に年若いアルキミダースの勝利という現実の出来事の輝きと家系の問題性という不思議さを（そこから発して）宇宙的規模にまで投射、展開してみせることだったのではないだろうか。現実の事件、耕地の比喩、そして神々と人間の関係をめぐる遠大な gmōmē の3者の間にはいかなる意味でも因果関係は存在しない。しかし、それらの間のアナロジーの各層の中心にあるのは、人間と神々の共通の母であり、大地の生産力の源でもあり、更に1つの血筋の間歇的な輝きの源泉でもある、仮に大地とでも名付けるしかない普遍的で根源的な力である。その意味ではこの analogia そのものこそがピンダロスの詩的世界にとっての真の意味での cosmogonia だったと言えるかもしれない。

注

1） テキストは *Pindari Carmina cum fragmentis* (Snell-Maehler) I (1971)、II (1975)、scholia は *Scholia vetera in Pindari Carmina* (Drachmann) III (1927=1966) による。

2） Drachmann *p*.101、scholia は当然のように *ἐκ μιᾶς ματρὸς* を補なって解釈している。

3） *Pindari Carmina cum lectionis varietate et adnotationibus* (Heyne) I (1798) *p*.48516

4） *Pindari Opera quae supersunt* (Boeckh) II-*2* (1821=1963) *p*.403

5） *Pindari Carmina prolegomenis et commentariis instructa* (Christ) (1896) *p*.277 Boeckh-Dissen への反論は J.B.Bury：*The Nemean Odes of Pindar* (1890=1966) *p*103。1) の同種説は Croiset、Bury、Farnell、Rose、Norwood、Finley、Duchemin、Thummer (Religiositaät)、Bowra、H.Fränkel、Werner、Slater、Conwey、Lloyd-Jones、など、2)

の異種説は Boeckh、Rumpel、Donaldson、Sandys、Jebb (Pindar)、Wilamowitz、Puech、des Place、Jaeger、Méautis、Bundy、Lesky *(History of Gr. Literature)*、Nisetich、Lattimore、など。

6) Finley : *Pindar and Aeschylus* (1955) 73-76、参照。

7) ヘシオドスではむしろ *Theog.*106/7、参照。

8) Boeckh-Dissen *p.*403

9) Clemens Alex. : *Stromata*5.14、102.2

10) Lloyd-Jones : Pindar and the after-life～「*Pindare*」 *Entretiens sur l' antiquité classique Tome XXXI* (1984) *p.*272

11) Drachmann *p.*102～3

12) *φύσις* をより広くとらえようとしたのは Mezger、Bury、Christ、Puech、Sandys、H.Fränkel、Méautis、Thummer、Werner、Nisetich など。

13) Drachmann *p.*102/3

14) もう1つの例は作者不詳悲劇断片 *καὶ παιδὶ καὶ γέροντι προσφέρων τρόπους TrGF vol*2.*p*132 F453=*sch.ad Pindar.N.III*.127 奇妙なことに3例ともピンダロスに関係している。

15) cf.*Py.VIII* 96-7

16) Bowra : *Pindar* (1964) *p.*97

17) cf *Ol.VI* 57～70

18) Bundy : *Studia Pindarica* II = *Univ. of California Publications in Cl. Philology vol*18 (1962) *p.*36-44

19) Prooimion の構成は以下の通り。

Ἓν ἀνδρῶν, ἓν θεῶν γένος ↔ *ἐκ μιᾶς δὲ πνέομεν ματρὸς ἀμφότεροι*

διείργει δὲ πᾶσα κεκριμένα δύναμις, ↔ *ὡς τὸ μὲν οὐδέν, ὁ δὲ χάλκεος ἀσφαλὲς αἰὲν ἕδος μένει οὐρανός.*

ἀλλά τι προσφέρομεν ἔμπαν ἢ μέγαν νόον ἤτοι φύσιν ἀθανάτοις,

καίπερ ἐφαμερίαν οὐκ εἰδότες οὐδὲ μετά νύκτας
ἄμμε πότμος
ἄντιν' ἔγραψε δραμεῖν ποτὶ στάθμαν.

τεκμαίρει { δὲ } καί νυν Ἀλκιμίδας τὸ συγγενὲς ἰδεῖν

20) 人間の家系の間歇性と大地の実りのリズムのアナロジーは *Nem. XI* 37～43でもより手がこんだ形で繰り返されているが、他方不幸の後に再び幸福が訪れるというパターン（*Py. V* 10～11、*Isth.* IV 16～19 etc）に見られる季節の変化のリズムとは明らかに性格を異にしている点に注目したい。

21) v 9 の*τεκμαίρει* は *Nem. XI* 43～44のゼウスからの*τέκμαρ*と呼応して *Διόθεν αἶσα* の意味を限定している。

22) 西村太良「個体の変容—Pindaros *Ol* II 56～80」（慶大言語文化研究所紀要 xx（1988）191—200）参照。